

令和 6 年 6 月 6 日現在

機関番号：13301

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2023

課題番号：18K13310

研究課題名（和文）子どもへの聴き取りで用いる補助物（人形）の特徴が報告内容及び影響

研究課題名（英文）The influence of using distinctive supplementary medias (dolls) in children's event reporting

研究代表者

上宮 愛 (Uemiya, Ai)

金沢大学・人文学系・講師

研究者番号：50555232

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,500,000円

研究成果の概要（和文）：子どもの性被害、性的虐待において、被害内容の聴取を行う際にアナトミカル・ドール（anatomical doll：AD）と呼ばれる人形を用いて、その体験した事実を再現させるような手法で聞き取りを行う場合がある。本研究では、体験した出来事の報告においてADを用いる場合の効果について検証した研究に関する文献レビューを実施した。また、文献レビューによってまとめた内容を実際の事案等においてADを用いた聴取を行う可能性がある警察官・検察官、約274名に対してオンライン講義を通じて情報提供を行った。加えて、人形の特徴が子どもの報告ないように及ぼす影響について、4から9歳の子どもの42名を対象に実験を実施した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

国内の実践では、面接の中でADを用いる方法と、反対にADを用いることを推奨しない面接手続きが存在する。特に、国内では、ADについて記された日本語の学術論文や著書がほとんど存在せず、国内の実務家がアクセスできる情報の数は限られている。本研究において、実務家274名に対してADに関する実証研究に関わる情報を提供できたことは、国内の実務場面において、ADを用いる事の有効性と危険性に関し、エビデンスにもとづいた議論を行う契機となる場を提供したと考えられる。また、学術的な側面においても、従来の研究方法とは異なる実験手続を用いたことにより、新たな実証データの蓄積に貢献できたと考えている。

研究成果の概要（英文）：In cases of child sexual abuse, anatomical detailed dolls (ADs) are used in interviews with victims for the purpose to reenact and report the facts of their experiences. In this study, we conducted a literature review of studies that examined the effectiveness of using ADs in reporting experienced events. In addition, information obtained from the literature review was also provided through an online lecture to approximately 274 police officers and prosecutors who may conduct interviews using ADs in actual cases. Also, an experiment was conducted with 42 children between the ages of 4 and 9 to test the effectiveness of using ADs when reporting the staged events they had experienced. The purpose of using ADs is often to obtain more detailed information than verbal reports. However, contrary to this purpose, there was no significant difference in the amount of information reported by participants who reported their experiences using ADs versus those who only gave verbal reports.

研究分野：認知心理学

キーワード：アナトミカル・ドール 子ども証言 司法面接 再現 エピソード記憶 性的虐待 アフォーダンス

1. 研究開始当初の背景

子どもの性被害・性的虐待では、被害内容についての聴取を行う際に、言語発達の問題、性的知識の欠如、そして、恥ずかしさの問題などにより、言葉だけで供述を求めることが難しい場合があると考えられていることから、子どもの報告をサポートする補助物として、アナトミカル・ドール (anatomical doll; anatomically detailed dolls; 以下、AD とする) と呼ばれる人形が用いられることがある。AD は、性器、陰毛、胸のふくらみなどが備わっており、その正式名称は「ティーチ・ア・ボディ・ドール (Teach-a-body doll)」と呼ばれている。1981 年頃から、子どもや障害をもつ人々に対して、身体部位やその機能・仕組みについて教え、性教育を行うために開発された人形である (Faller, 2007)。これらの性教育を行う目的で作成された人形が、特に米国では 1990 年代より、性的虐待の疑いがある子どもへの被害聴取において用いられるようになった。AD は、触られた身体部位の特定や被害の詳細 (体勢、動きなどを含む) について聴き取る際に、思い出す手がかりとしての役割を果たす可能性があると考えられてきた (Saywitz, Goodman, Nicholas & Moan, 1991)。一方で、AD の持つ特徴 (例、性器の有無) が、子どもへの性被害の聴き取りにおいて誘導的に働く可能性があるという指摘もある。

体験した出来事の内容についての子どもへの聴き取りにおいて、AD を用いることの問題点として 3 つの点をあげることができる。

第一に、(一般的な人形も含めて) 人形を用いた報告では、人形に自分自身を投影し、人形が自分の象徴であることを理解する能力が必要となる。子どもの認知発達に関する多くの先行研究より、これらの能力が獲得されるのは 4 歳以降であることが示されてきた。AD に関する先行研究でも、3 歳児ではほとんどの研究で有効な結果が得られていない。人形を用いた報告は年齢の低い子どもや認知発達に遅れがある子どもにとっては難易度の高い課題となる可能性がある。

第二に、AD そのものが誘導となる可能性についてである。Everson and Boat (1990) では、虐待経験のない 2~5 歳児を対象とし、子どもが AD で遊ぶ際の行動を観察した。その結果、AD の性器部分を触る、探索するという行動が一般的にみられ、それぞれの年齢において 50% の割合で生じることが示された。

第三に、AD を用いた子どもの報告を評価する側の大人の問題がある。実際の正確性や情報量に関係なく、単なる言葉による報告に比べて、人形を用いた報告は視覚情報が多いという点により具体的である印象を与える可能性がある。

2. 研究の目的

本研究では、2 つ目の問題として上記に示した、人形 (補助物) の特徴が子どもの報告内容及び影響について検討を行う。これまでの先行研究では、子どもは穴があれば指を入れてしまふ、出っ張りがあれば引っ張るなど、特に AD の持つ性的な特徴 (性器の有無) が子どもの行動をアフォードし、実際に体験しなかった内容の報告を引き出す可能性があるという点について検討されてきた。その一方で、AD の可動域 (手足などを動かせる範囲) について検討を行った研究は少ない。特に先行研究では、接触があった身体部位を特定させるなどの方法について検討を行ったものが多い。例えば、Bruck, Ceci, & Francoeur (2000) では、3 から 4 歳児の参加者の半分は医療機関での検診の中で性器の診察、手首にリボンを巻く、T シャツをまくりあげてお腹にシールを貼る、黄色い棒で靴下の上から子どもの足をくすぐるなどの一連の出来事を子どもに体験させ、その内容について AD を用いて報告を求めるような実験を実施している。つまり、先行研究の多くは、接触があった身体部位を特定させたり、人形の可動域に影響しない範囲の動作について検討を行ったものが多い。しかし、AD には膝や肘の関節が備わっておらず、例えば、性被害などで時折経験する可能性がある、四つん這いなどの体勢を再現することがそもそも不可能である。一方、例えば手の甲を腕にくっつけるなど、AD は本来人間の動きとして不可能な動作が再現可能となる側面も持ち合わせる。そして、先行研究ではこれらの具体的な体勢や動作について検討して来なかった。

本研究では、この様な、人間の動きを正確に再現できない、もしくは、人間の可動域の範囲を超えた動きが再現可能であるという AD の特性が、子どもの体験内容の報告に及ぼす影響について検討することを目的とする。また、体験内容にツイスターゲームを用いることによって、性的虐待などで経験するような、「未知の動作」の体験を実験場面で再現する手続きを用いる。

3. 研究の方法

3-1. 研究参加者

研究参加者は、4~9 歳児 49 名であった。途中で実験を中断した、または、全ての課題を完了できなかった参加者 9 名を除外し、本報告では 40 名の参加者のデータを分析の対象とした。

3-2. 要因計画

要因は参加者間要因であり、報告条件 (人形・言語) の 1 要因 2 水準であった。人形条件の参

加者は 21 名、言語条件の参加者が 19 名であった。

3-3. 課題の種類

Staged Event：子どもは、実験者とツイスターゲームを行った。ツイスターゲームでは、赤、青、黄色、緑の 4 色の円が縦に 6 つ、横に 4 つ並んだシートの上で、実験者の指示した色の円に手足を乗せて姿勢をとるよう求めた。また、このゲームでは、お尻が地面についてしまうと参加者の負けであることを伝えた。実験者の出す指示は、実験の統制の都合上、全ての参加者が同じ姿勢をとるように計画されていた。ツイスターゲームの様子は、ビデオカメラにより録画した。

昼夜課題 (Gerstadt, Hong, & Diamond, 1994)：昼夜課題は、子どもの抑制能力を測定した課題である。課題では太陽と月のイラストが印刷されたカードを提示し、子どもに対し、「もし私が昼って言ったら、太陽のカードを指さしてね。もし、夜って言ったら、お月様のカードを指さしてね。」と教示し、練習試行を昼、夜それぞれ 2 試行実施した後、本試行を実施した。本試行は昼、夜それぞれ 8 試行の計 16 試行を実施した。昼と夜の提示順序はランダムとした。昼夜課題の得点範囲は 0 から 16 点とした。

逆唱スパン課題：逆唱スパン課題は、子どものワーキング・メモリ・スパンを測定する課題である。本研究では、日本語版逆唱スパン課題を実施するため、小川・子安 (2008) で用いたリストを使用した。課題では、「これから、私がここにある紙を指差ししながら　　ちゃんにことばを言って行きます。　　ちゃんは、そのことばを私とは反対の順番で言ってください。」と説明を行った。練習試行を 2 試行、本試行を 2 単語から、5 単語まで各単語数 2 試行ずつ実施した。各単語数において、2 試行のうち 1 試行通過すれば、次の単語数に進むという形式で実施された。逆唱スパン課題では、再生できた最大の単語数を得点とするため、得点範囲は 1 点 (2 単語で失敗) から 5 点とした。

再生課題：再生課題では、子どもは、実験の最初に実施したツイスターゲームで体験した内容について、人形条件、言語条件にそれぞれ分かれて報告を行った。再生課題の様子は、ビデオカメラと IC レコーダーにより録画、録音した。言語群では「最初にやったツイスターゲームについて、どんなことをしたか、私にお話ししてください。」と伝えた。人形群では、「最初にやったツイスターゲームについて、どんなことをしたか、ここにある人形を使って、私にやって見せてください。」と伝えた。また、最後に全ての子どもに対して確認を目的とし、ツイスターゲームで写真撮影を行った際の 3 つのポーズについてそれぞれ条件で報告を求めた。

DCCS 課題 (Frye, Zelazo, & Palfai, 1995)：この課題は認知的柔軟性または葛藤抑制を測定する課題である。2 種類のイラスト (トラックと星型) が赤色または青色で書かれたカードを用意し、その中から 2 枚のカードをモデルカードとして子どもに提示した (例：赤い星のカードと青いトラックのカード)。次に、実験者は 2 種類の分類カードを子どもに提示した。分類カードにはモデルカードとは色と形の両次元で異なるイラストが描かれている (例：青い星のカードと赤いトラックのカード)。実験者は子どもに、提示された分類カードをまずは色 (もしくは形) で分類するよう求め、その後、形 (もしくは色) で続けて分類するよう教示した。子どもは分類基準のスイッチ後に 8 枚のカードを分類し、正しく分類できた枚数を得点とした。得点範囲は 0 点から 8 点であった。

8 ボックス課題 (Diamond, Prevor, Callender, & Druin, 1997)：この課題はワーキングメモリを測定するものである。色の異なる 8 つの箱を子どもに提示し、それぞれの箱の中にはシールが入っていることを子どもに伝えた。子どもが最初の箱を開けた後、子どもに目をつぶるように指示し、箱の位置を動かして次の試行に進んだ。8 つの箱はすべて異なる色であり、子どもが箱を開けるたびに実験者は箱の蓋を閉め、子どもが目を閉じていることを確認してから箱を動かした。課題は子どもがすべてのシールを見つけるか、5 回連続して失敗するまで続けられた。得点範囲は 0 点から 8 点であった。

3-4. 実験手続

実験は個別形式により実施された。参加者である子どもは、staged event であるツイスターゲームに参加した。ゲームの最中で、参加者は 3 回写真を撮るという体験をした。ツイスターゲーム終了後に、参加者はパーティションで区切られた隣の空間に移動し、そこで、認知機能を測定する、昼夜課題、逆唱スパン課題を行った。逆唱スパン課題終了後に、再生課題を行い、参加者は 2 つの条件に分かれてツイスターゲームで体験した内容について報告を求められた。言語条件の参加者は、ツイスターゲームで体験した内容について言語のみで報告を行った。一方、人形条件では、参加者と同じ性別の AD を用いて、ツイスターゲームで体験した内容について再現するよう求めた。再生課題の最後では、確認のため、全ての参加者に 3 回写真を撮った時の体勢についてそれぞれ、条件に沿って報告を求めた。再生課題終了後に、DCCS と 8 ボックス課題を実施した。

4. 研究成果

参加者の再生課題における3つの体勢の報告についてコーディング作業を実施した。正答、誤答に関わらず、再生課題において、参加者がツイスターゲームでの1つの体勢について何らかの報告を行った場合に1点とし、最大3点までの範囲でツイスターゲームでの3つの体勢のうち報告できたものが幾つであるかをカウントした(情報量)。体勢ではなく、ツイスターゲームについて「楽しかった」などの感想や、ゲームのルールに関する説明のみがなされた場合は、0点とした。

参加者が報告した体勢の数について、条件間でt検定を行った結果、有意な差は見られなかった(AD条件: $M = 1.19$ 、言語条件: $M = 1.05$)。先行研究の結果と同様(Salmon, Pipe, Malloy & Mackay, 2012)、ADを用いることによる情報量の増加は、本研究においてもみられなかった。

報告された体勢の数(情報量)を目的変数とし、4つの認知課題(昼夜課題、逆唱スパン、DCCS、8ボックス課題)を説明変数とした重回帰分析を行った結果、目的変数を予測する有意な説明変数は得られなかった。人形を用いた報告では、ADに自分自身を投影し、本来は自分自身では見ることができない自分の姿をメタ的な視点で理解し、それを再現する能力が必要となる。そのため、様々な認知能力がADを用いた報告では必要となると予測したが、予測に反し、本研究ではこれらの認知能力と体勢の報告量との間に関連を見出すことはできなかった。

本研究課題では、研究期間中にCovid-19の影響により、子どもを参加者とした個別実験の実施が遅延する状況が発生した。そのため、データ収集を完了する時期が遅れ、研究期間中に全てのデータ分析を終えることができなかった。今後、以下の分析を進める予定をしている。

- 1) 現在、再生課題における参加者の発話の書き起こし作業を終える段階にある。書き起こされた参加者の発話をひらがなに変換し、発話文字数を算出する。体勢の報告量に関わらず、参加者の発話文字数について人形条件と言語条件とで比較を行い、それぞれの条件での報告がどの程度参加者の長い供述を引き出すのかについて検討する。
- 2) 再生課題での報告の正確性を検証することを目的とし、参加者のツイスターゲームでの映像と一致する再生課題での情報についてのコーディング作業を進める。得られた正答数について、人形条件と言語条件との比較を行い、それぞれの条件での報告がどの程度正確な情報を引き出すのかについて検討を進める。
- 3) 再生課題での報告の誤答数について、参加者のツイスターゲームでの映像に含まれなかった情報や映像とは異なる情報のコーディング作業を進める。得られた誤答数について、人形条件と言語条件との比較を行い、それぞれの条件での報告がどの程度不正確な情報を引き出すのかについて検討を進める。

引用文献

- Bruck, M., Ceci, S.J. & Francoeur, E. (2000). Children's use of anatomically detailed dolls to report genital touching in a medical examination: Developmental and gender comparisons. *Journal of Experimental Psychology: Applied*, 6, 1, 74-83.
- Diamond, A., Prevor, M. B., Callender, G., & Druin, D. P. (1997). Prefrontal cortex cognitive deficits in children treated early and continuously for PKU. *Monographs of the Society for Research in Child Development*, 62(4), 1-205.
- Everson, M. D. & Boat, B. W. (1990). Sexualized doll play among young children: Implications for the use of anatomical dolls in sexual abuse evaluations. *Journal of the American Academy of Child and Adolescent Psychiatry*. 29, 5, 736-742.
- Faller, K. C. (2007) *Interviewing children about sexual abuse: Controversies and best practice*, Oxford University Press, p. 110-141.
- Frye, D., Zelazo, P.D., & Palfai, T. (1995). Theory of mind and rule-based reasoning. *Cognitive Development*, 10, 483-527.
- Gerstadt, C.L., Hong, Y.J., & Diamond, A. (1994). The relationship between cognition and action: performance of children 3 1/2-7years old on a Stroop-like day-night test. *Cognition*, 53, 129-153.
- 小川絢子・子安増生. (2008). 幼児における「心の理論」と実行機能の関連性: ワーキングメモリと葛藤抑制を中心に. *発達心理学研究*, 19, 2, 171-182.
- Salmon, K., Pipe, M.E., Malloy, A. & Mackay, K. (2012). Do non-verbal aids increase the effectiveness of 'best practice' verbal interview techniques? An experimental study. *Applied Cognitive Psychology*, 26, 370-380.
- Saywitz, K. F., Goodman, G. S., Nicholas, E. & Moan, S. (1991). Children's memories of physical examinations involving genital touch; Implications for reports of child sexual abuse. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 59, 682-691.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 上宮愛, 仲真紀子, 鈴木愛弓, 横光健吾, 山祐嗣, 山本渉太, 越智啓太	4. 巻 20
2. 論文標題 性犯罪の再犯予防に関する現状と課題 - 領域横断的な共同研究の可能性に焦点を当てて	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 法と心理	6. 最初と最後の頁 121-127
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 山本渉太, 上宮 愛, 渡邉和美, 横田賀英子, 越智啓太, 米田英嗣
2. 発表標題 日本心理学会公募シンポジウムSS-018 脆弱な被面接者に対する捜査面接
3. 学会等名 日本心理学会第83回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 上宮 愛, 仲真紀子, 鈴木愛弓, 横光健吾, 山祐嗣, 山本渉太, 越智啓太
2. 発表標題 法と心理学会第20回大会 WS7 性犯罪の再犯予防に関する現状と課題 - 領域横断的な共同研究の可能性に焦点を当てて -
3. 学会等名 法と心理学会第20 回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 羽瀨由子, 山本渉太, 田中晶子, ローリー メラニー, 萩野谷俊平, サンティラ ベッカ, 仲真紀子, 佐々木真吾, 上宮 愛, 松尾 加代
2. 発表標題 法と心理学会・日本心理学会連携企画 SS-002 オンラインによる司法面接研修: 課題と展望
3. 学会等名 日本心理学会第84回大会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 福島由衣、荒川歩、松尾加代、上宮愛、石崎千景、三浦大志	4. 発行年 2019年
2. 出版社 勁草書房	5. 総ページ数 392
3. 書名 その証言，本当ですか？ 刑事司法手続きの心理学	

1. 著者名 加藤弘通、川田学、荒川歩、日高茂暢、河西哲子、伊藤崇、上宮愛、大久保智生、樋口匡貴、大谷和大、坂井敬子、藤本昌樹、藤岡大輔、岡田智、齋藤暢一朗	4. 発行年 2020年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 234
3. 書名 公認心理師の基本を学ぶテキスト2 心理学概論 歴史・基礎・応用	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------